

第5巻第8号
通巻第56号

祝 徳島県立 小松島高校 甲子園初出場

冷夏にもめげず、心のトンカチをふるい続ける人がここにもいた。それは、今夏、甲子園に初出場を果たした小松島高校出身、向井イツセイの父、そして母である。読んででは真意を汲み取れず、書いてはメモの一つもとれず。そんな、未熟者が横行する世の中、戦中戦後、現代を文字に頼らず生き抜くあなたたちを、からす新聞は応援します。

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今日の紙面から

- 二・三(面) 北(欧)面
- 特派員Gスウェーデンレポート
- 四(面) からすライブラリー
- CD 『キリング・タイム』
- 本 『365デイズ』
- 演劇 『高円寺三バカ兄妹弟』
- 五(面) 国際(面)
- ロンドンレポート
- 六(面) 山岳(面)
- タカツバキス富士登山記
- 七(面) 語(面)
- イエス・オア・ノー

十年一昔という表現がある。私がインターネットを始めたのは一九九四年のことだから今年でちょうど十年目ということになる。長いような短いような。何が何だかわからないまま、ネット・サーフィンならぬネット・スネーキングとでも呼ぶべき地を這うような遅い速度で、インターネットという大海に乗り出した私(たち)であった。費用は決して安くはなかったし、日本語での正確な情報が多く出回っていたわけではなく、いい加減な記事や噂に右往左往する場面も少なくなかった。インターネットが使えるようになって、世界が一気に小さくなったように思えたもの。喻えてみれば、初めてオートバイに乗ったときの、これさえあればどこにでも行くことができるんだ、というような感覚に近いものがあった。コンピュータがネットワークに繋がっていさえすれば、そこがニューハンブシャーであれ、ロンドンであれ、輪島であれ、それこそあつという間もあらばこそ。

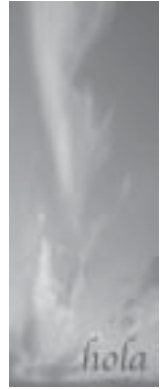
変。私の遊びや仕事の大半がメールを媒介にしている現実がある。えっちらおっちら作り上げたホームページに曲をひとつアップロードするだけのことでも、ああでもないこうでもないで大騒ぎした十年前。なかなかの悪戦苦闘であった。しかし、苦勞した甲斐があったというべきか、音楽を聴いた見ず知らずのアメリカ人から感想メールが届いて、何だかとても嬉しかったことを思い出す。メールやウェブやチャットをあれこれうるうちに、ネット上で誰かを発見したり誰かに発見されたり。新たに知己を得た人々、再会を果たした人々。そして、これから出会う人々。

本やCDを直接外国から求められるようになったことも大きい。あまりに嬉しくて、当初は毎日のように買い物三昧。翌月の引き落としで目の玉が飛び出そうになることもしばしば。一カ月の間に、車は買えなくともオートバイなら買えるほどの買い物をしてしまったことも数回。本やCDやソフトウェアも数が揃うと恐ろしいことになるのであった。

顧みるに、ボリス・ヴィアンの新しい全集がぼつぼつと発行されていく度に購入できたのだから、EDのマッキントッシュ版を買う気になったのだから、インターネット

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。誰でも自由に参加できません(無茶じゃない範囲で)。



ウンター・デン・リンデン
 リンデン（菩提樹）の並木道
 群島を抜けてヘルシンキとを一昼夜
 で結ぶバイキングラインの客船



ストックホルムの湖と海

Archipelago

ストックホルムにて

シベリア上空で、同じ経路を反対向きに飛びゆくジャンボ機とすれ違った。せめて5キロくらいは水平に離れていてくれるだろうと思うのだが、空にも航路があることを実感する。エンジンの後ろには、真っ白い水蒸気の雲が勢いよく噴出されていて、大変な推力を伺い知ることができる。時速950キロくらいのスピードのはずだから互いにすれ違うとマッハ2近いということになる。速い。数秒で視界から消えていった。しばらくして少し小型の飛行機が飛んでいったが、明らかに推力が異なる。

眼下には、無数の島と湖が見えてくる。岩盤の上に、どうやって留まったのか、土がのり、国土がつくられた。だから、岩盤の起伏がそのまま湖をつくり、無数の島をつくっている。アーキペラゴ。群島である。

ボスニア湾の奥はフィヨルドだが、バルト海に近い南の方は、沢山の島々がスウェーデンの国土をつくる。北欧のベニスと呼ばれているストックホルムは、北緯約60度だからサハリンの遙か彼方、オホーツク海の北端くらいの緯度にあたる。

北欧の夏は白っぽくて光線が弱い。パール、paleという言葉がぴったりだ。リンデンの葉が柔らかい緑の光線を輝かせている。菩提樹である。シューベルトの歌曲のように、また東ベルリンの目抜き通りウンター・デン・リンデン(菩提樹の下(の並木道))の名が示すように、この木はドイツなど豊かな緑を育む土地に顕著な樹種だ。一般に南の暑い乾いた地方では育たない。葉は、若葉の緑色に近い、きれいな色をしている。

街には、海図や船の部品やランプなどを売る店が目につく。群島が記された地図は、単純に美しかった。ヨットやボートがもともと人びとの交通手段だったのだ。水と土が近い。というよりも岩が水の上にてている。

水面が平滑に見える。粘性が強いようにも思う。考えてみれば温度が低ければ分子の活動は不活発になるのだから無理はないのか。日光が低い角度で照射するから、水面がことさら強調されて感じられるのかななどと思う。

遙か北は、北極圏、ラップランド、白夜とトナカイの地域に到る。地球の遙か北にきてしまったことになる。

(篠崎健一)



岩そのままの小さな島々

Archipelago

刹那

小沢健二(東芝 EMI)



小沢健二のニューアルバムが発売される、ようだ。タイトルは『刹那』。彼のシングル集である。5年前のシングル曲といえど、ファンにとっては待望である。小沢は青春であり光だったと思つた。東京タワーの傍を通れば、彼の歌詞を思わず口ずさむ。あの音痴さも苦ではないほどに、彼の楽曲は私たちをときどきさせた。しかし、去年に発売された彼のアルバムは当時の面影を故意に消しているかのようでそれに正直躊躇った。だが、再び現われる、青春の音。『刹那』。

9月26日、レコード屋にて何事もなく並んでいるよう、祈る。

(と)



Sam's Bar

Donald Barthelme & Seymour Chwast

Dolphin/Doubleday, 1987

ISBN 0-385-24264-6



Books

バーセルミのテキストとチュワストのイラスト。副題にあるように、これは、とあるアメリカの風景を描いたものである。サムのパールに集う人々、サムのパールを通り過ぎる人々。奇妙なような、ありふれたような空間。アメリカに限らず、現代の都市のどこにもありそうななさそう。店に入ってチャックに尋ねる「サムはどこだい？」

バーセルミ好きの私は、彼の名まえに釣られて購入した本であり、事実、テキストはいつも通りに秀逸。彼の文体はこの本にこそ最適なのではないかと思ふほど。

しかしながら、英語が苦手な人でも、ページを繰りながらあれこれと想像を広げれば十分に楽しめる。でも、気になるページでは辞書を開いてみたりしながら、本を読む私たちもグラスを傾けながら。

(全太)

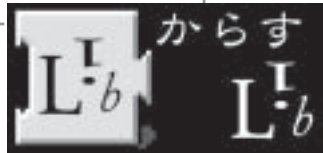


高円寺三バカ兄弟

きょうだい

作・演出：じょじ伊東

出演：ちゅうり、山田秀香、好宮温太郎



じょじ伊東作・演出による3回目の芝居は、「番外公演」。今回初めて家族を描いたから「番外」なのだそう。

高円寺の一軒家に住む三兄妹、両親はいないらしい。長兄の寛大な人柄からか、いろんな人が出入りする家である。ただ、一人の女の子を拾ってきたことから女房は只今実家に戻り中。妹は妹でふらつと舞い戻ってきて、離婚してきたという。末の弟は家について悶々と毎日を持て余す。そこに長兄の妻の戻り先から義理の弟夫婦がやって来て……。

こぢんまりとまとまったな、といった印象である。なるほど、初回、前回に所々垣間見えたつたなさは随分と影を潜め、安定感が増したように思われた。登場人物を絞ったこともあるだろう。でも、それならもつと中心に据えた三バカ兄弟をもつときちんと描いてもらわねば。三人はそれぞれ人の良いバカ、能天気なバカ、頭の悪いバカ、なんだろう。いずれにせよ、どれもあんまりバカに見えない。もつと破綻した風味がないと「バカ」と呼ばれるにふさわしくないと思うんだけど。だから、笑えない。私としては、ちっちゃくまとまらずに、むちゃくちゃでもいいからもつと笑かしてほしかったのであった。

(望月)

London Report

空気の温度

ひよんな事から、フィリピンに行くことになった。正確に言えば前からわかっていたことで、今は夏休みの真っ最中。一時帰国して、日本で休みを過ごせる理由の半分はこの為。母のフィリピン旅行の付添の為なのである。去年も同じような旅行をしているので、特別目新しい事も無く、僕としてはせつかく旅行に来ているのに自由に動き回れないのが少し不満だったりもするのだが、イギリスから帰って来てからずっと天気のスッキリしない日本を出て、暑い国に行けると思うとまんざらでもない。更に今回は、もうすぐフィリピンで結婚式を挙げる友達に会う、という目的も加わり、「旅行に連れて行ってもらえる事を感謝しなくちゃいけないな」。そんな事を思いながら空港へ向かった。

僕は昔から暑い気候が好きで、風の匂いが夏の到来を思わせてくれる五月などは居ても立ってもいられなくなってしまう。今年は日本に帰って来てから身体の調子があまり良くなく、病院に一週間ほど入っていたりしたものだから、「夏だなあ...」と改めて感じる暇もなく、何となく今まで過ごしてしまっただけ。天気が悪かった所為なのか、調子が悪かった所為なのか、どちらかははっきりと分らないが夏の気温と湿度に、特別に想像力をかき立てられてワクワクするというのがなかったのだ。そんな事さえも、フィリピンに着くまでは忘れていた。昔大先生が「外国にあまり行きたいとは思わない」「理由の一つとして「想像力の問題」だと言っていたのを思い出す。身体で、全てを体験するには限界があるという話。そこを想像力で補えられれば、わざわざ自分で体験してみる必要がないと言っただけ。残念ながら僕の想像力はそこまでの広がりを持っていないよ。いつ、何で

も一度は体験してみる必要がある。違う国の文化や人々、そう言った物に直接触れた事により想像力が働きます。そんな訳で、マニラ空港に到着し空港の外に一步出たところから始めて、その空気、温度、雑踏、街並み、去年感じた様なもの、フィリピンの匂いを思い出した。空港から出てくる人を迎えに来た人々の人だかりを見た瞬間のことである。「夏だなあ...」と感じ、その空気の温度を、指先で直に感じて感じた様な気がしたのだ。

こうして、そう言った意味での僕の夏はずいぶん遅く始まった。旅先にもって来ていたレイ・ブラッドベリの短編集がやけに面白い。冬の寒い日にこたつの中で読むのがいい作家だ、と思っていたのは間違いだったのか。僕はマニラの雑踏の中で、最後のサーカスの跡地にたたくみ、プールサイドで息子が号泣をかける父親の声を聞いた。気をつけの姿勢で、じっと「休め」の音がかるのを待つ息子が見える。何かを体験する事によって、そのずっと向こうまで想像力が広がった。一箱六〇円のタバコを吸いながら僕は、旅行に連れて来てもらえたことを改めて感謝したのである。

(神山)



「結局、常に世の中なんて動いていて次々に新しい細胞が出来ては古いものが死滅して排せつされるようなものだ。君の頭の髪だって三年前は眉から十三cmのところはまだあったじゃないか。十三年前にはマッシュルームカットだっただけじゃないか。二十三年前には下の毛だっただけじゃないか。ガタガタ言っただけじゃないか。」

「ほな、どうしたらええん？」



と前は渋谷で例の十四歳の少女拉致事件かてあつたしな、そつや、その前は長崎で十四歳が二歳を殺したやろ？ あと何んや、中年男性の死因一位が今や自殺らしいやんけ？ あとイラク見てみい。アメリカ、滅茶苦茶やつてるやん。そんな世の中とはよつ妥協せえへんわ。」

「世の中が悪くなって行ってるってよく言えるな。何年生きてんだ？ 百年生きたさんさんさんが言うならまだ分かるぞ。しかも考えてみい？ 例えば五十八年前には広島、長崎には原爆が落とされて一瞬で蚊みたいな何万人という日本人が殺されただろ？ そしてその頃、酷い世の中だ、なんて言ったら刑務所行きだぞ。八十三年前には朝鮮を勝手に日本ものにして無理矢理日本語話させて何万人って拉致して来て炭坑で働かせたり、女性はそのころ今十四歳が、なんていってるけどそんな子供まで好き勝手にレイプしたり慰安婦なんていって日本軍に強制援助交際させてたじゃないか。百三十五年前までの二百年間は武士なんていう軍人が統治していてそれこそ農民に生まれたというだけでほとんど奴隷のように生きて行かないといけないんじゃないか。非人っていう身分まであつたっていうじゃないか？ 人なのに人でない、って烙印を社会に押されてんだぞ。しっかし実際、どんな生活送ってたんだろ？ なあ。あと、そうキリスト教も信じちゃいけないかったんだぞ。長崎とか天草なんかみんな隠れて地下に礼拝室作ってお祈りしてたんだとよ。バレたら死刑。百七十二年前は物凄い飢饉で日本中が飢えて死体だらけになり、松ノ木の皮とか草まで食ったっていうじゃないか。ちなみにその当時の海外っていつたらイギリスのさばってき、平気で他国に踏み込んで

「じゃ、君はその薄くなった髪をどうしてる？ 坊主みたくして自分の妥協できる範囲内までもっていつてるじゃないか。心ついていうか、価値観っていうかそれも同じような作業をすればいいんじゃないか？」

「妥協やんか、そんなん。」

「完璧なんてあるわけないだろ？ あるとすれば神様の世界か、気狂いの世界なんじゃないか？」

「そんなん分かつてるわ。けどな、絶対世の中、どんなあかん方向に来てるぞ。昨日のニュースも十六歳の少女がやくきに自分が二股掛けとつた男殺させたとか言つてるし、ちよつ

富士登山記

今年も富士に登ろうとお誘いがあった。私はこれで二度目である。毎年お盆の時期になると、私たちは富士山に登りたくなるらしい。メンバーは、かつて寝食苦楽を共にした部活の友人達だ。彼らは私よりも多く富士山に登っており、中には、会社の懇親旅行として一週間前に登っている奴もいた。それなのに、再び登る。それは、決して富士に魅了されているからではない。実のところ富士登山でも何でもいいのだ。お互いのおもしろいところを引きだせれば。

私たちの富士登山では何かイベントを考えることが恒例になっている。例えば、頂上で宿泊する、頂上でパドミントンの試合をする、頂上でスイカ割りを楽しむなどなど(もうこれらはやっちゃいました)。やっているときは非常につらいが、それが結構笑い話になるものだから、やめられない。今年も頂上でパーベキューをするということになった。四キロの肉を背負って、炭と、コンロと鉄板と、水を数リットルと……考えただけでもうんざりするが、そんなことはおかないしと、全員かなり乗り気だった。

八月九日午前〇時〇〇分 台風十号が関東に接近中。

さて、パーベキューなんて無理であった。そもそも登ること自体無理なのではないか、皆そう思いながら

車で富士に向かう。富士に着いてみると、大荒れで外でまともに立つていられなかった。そこで、急遽予定を変更して、一日目はおとなしく河口湖周辺で一泊し、明日の登山に向けて少しでも疲れを癒そうと温泉につかるのであった……というのは嘘で、バッテリーセンター、ゲームセンター、ビリヤード等で汗を流しながら盛り上がり(何でも楽しくできるのが、彼らのすごいところである)、旅館で一息つくやいなや、夕方から皆で酒をのみまくる。私も飲みすぎて、マニュアル嘔吐をしなければならぬ始末。明日は本当に登れるのだろうか。

八月十日午前六時〇〇分 目もくらむくらいまぶしい。晴天である。

台風一過で雲一つない青空であった。このときを狙ってか、五合目は登山客でごったがえしていた。駐車スペースはもちろんなく、五合目のはるか下方から出発することになる。多少昨晚の疲れが残っているが、歩いているうちに気分が楽になった。さすが、霊峰富士である。霊験あらたかな効用があるみたいだ。とはいっても、皆の格好に目を移せば、短パンに、Tシャツ、コンビニの袋をぶら下げて、完全に霊峰富士山をなめきった格好をし、おまけにルンルンと楽しげで軽快な足取りである。いやはや事故が起きなければいいのだが。

(登山中、省略)

そんなことも杞憂にすぎず、無事登頂した。このときの達成感は普段では得難い気分である。頂上につく

やいなや、ビールを飲み始める。思っていた写真をとって、即下山した。富士登山がメインなのだが、あつという間に終わってしまった。六時間ぐらいかかるところを四時間で登り、四時間かかる下りを二時間で下りたのだから早く感じて当然かもしれない。がんばれば、一日三往復できそうな勢いであった。

帰りは近くの温泉につかって小休憩し、東京に向かう。旅行から帰って家に向かうのは、徐々に夢が覚めるのに似ている。非日常的な世界から日常の世界へ向かうこと。このことを自覚するのも、旅行の醍醐味なのだろうか。

それにしても、馬鹿なことをする(断っておきますが、決して人に迷惑はかけません)友人達と会い、一緒に何かをやり遂げるのは楽しい。突拍子もないことは思いつくけれどやらないというのが、多くの人の性向だろう。けれど、その友人達はちよつと違う。彼らには、何か人間らしい野蛮さみたいなものが含まれているような気がする。行動を共にすると、私もその野蛮さみたいなものを取り戻すことができる。勘違いしてほしくないのだが、これは健康的な野蛮さである。人を不幸にするような、陰険な種類の野蛮さとは違う。精神的な健康を促す野蛮さなのだ。

かといって、精神的な健康を得るために二日酔いで富士山に登った方がよいとは人には勧められません。

(高橋)



だからイエスって 言ってるじゃないの



学校英語にわすれ
ものありませんか？

裁判長：

You were not faithful to your wife, were you?

「あなたは奥さんに対して誠実でなかったということですね」

離婚は避けたい：

No! Certainly not!

「そうです！まったくそのとおりです！」

ここはが「ちがいます！誠実でした！」と反論の口火を切りた
い場面。でも言っていることは正反対。本当は、

Yes! Certainly yes!

「ちがいます！絶対ちがいます！」

と絶叫するはずだったのに。同じ過ちをまた繰り返してしまっ
た・・・。

・・・前夜はやんごとなき用事で帰宅できなかった。

妻：

Where were you last night?

「あなた、きのうの夜、どこにいたの？」

夫：

That's so long ago, I don't remember.

「そんな遠い昔のことなど、覚えちゃいないね」

妻：

You really don't?

「ほんとに覚えてないワケ？」

ここでストップ。飽くまでもシラを切りとおしたい彼は、「あ
あ、そうだよ」と答えたい。ということは、もちろん「イエス、ア
イ・ドゥー」

夫：

Yes, I do.

「いや、そんなことないよ」

妻：

OK. So tell me where you were.

「いいわ。だったら、どこにいたのが言ってよ」

あれ、なんかちがう。意図してたのはこんな展開だったのに。

夫：

No, I don't.

「ああ、そういうことさ」

女：

Stop kidding me!

「ふざけないで！」

ああ、こういうの学校でやったなあ、という人はかなりいるは
ず。イエス・ノーが逆転するので、われわれにはややこしいが、つ
まりはこういうことだ - - -

「～じゃないの？」と聞かれたときの Yes・No は、
日本語と逆になる。

うまく答えるには、Yes・No を後回しにして、I do
か I don't をまず意識して答えてみればいい。

日本人に共通するこの混乱をもたらず質問には、次の3つの形
がある。

You don't remember? (否定文・語尾上げ)

Don't you remember? (否定疑問・語尾上げ)

You don't remember, do you? (付加疑問・語尾上げ下げどちらも)

要するにどれも「～じゃないの？」である。付加疑問で語尾下
げれば、「～じゃないんでしょ」の意味だが、用法に変わりはない。
これに対処するには、「あっ、出たぞ、イエスとノーがひっくり返
るやつだ、えっと・・・」などととは考えないこと。それよりも、Yes・
No は飛ばしてかまわないから、まず先に、

I do (remember). 「憶えてるよ」

I don't (remember). 「憶えてないよ」

のどちらかを答えるようにすればいい。慣れてくれば、やがて自
然と Yes・No も合わせて言えるようになる。

では、少し練習をしてみよう。

【問題】 次の会話文の空欄に、Yes, I do. か No, I don't.
どちらか適当な方を入れなさい。

総書記：

You don't feel like it?

「そんな気になれないかね？」

1 生き抜いていく喜び組：

()

2 もう疲れた喜び組：

()

【答】: 1 = (Yes), I do. 「いいえ、よろしゅうございます」
2 = (No), I don't. 「ええ、ごめんこうむります」

Yes・No はあえてカッコに入れてあるが、どうだろうか。もう
少しほかの例も見てみよう。

(最終面に続く)

(七面から続く)

ホームステイ先のくそガキ:

You don't like me, do you?

「ぼくのこと嫌いなんだ」

- もうこいつにはキレてしまったあなた:

(No,) I don't. I don't like you.

「ああ。わたし、きみのこと嫌いだよ」

- お世辞でも好きと言っておきたいあなた:

(Yes,) I do. I like you.

「ううん。わたし、きみのこと好きだよ」

侵略者火星人:

Don't I look strange?

「ぼく、変に見えない?」

抵抗者地球人:

(Yes,) you do. You fucking octopus.

「いや、変だろよ。くされタコがっ」

セールス勧誘:

You haven't yet tried our legendary Ultra Power Kitchen Mixer?

「まだ私どもの伝説的ウルトラ・パワー・キッチン・ミキサーをお試しではありませんでしたか?」

いいかげんにしろよ:

(No,) I haven't. And I will never.

「ええ、ありませんよ。試す気もないし」

もっとも、Yes・Noで答える必要のない場合も当然ある。

武蔵:

You don't need your scabbard?

「鞘はいらぬのか」

小次郎:

It's none of your business.

「お主には関わりのないこと」

(望月)

トのおかげである。今、聴いているレジナ・スペクタのような、海外のインディーズを気楽に手に入れられるようになったのだってそうだ。何と便利な世の中だろう。

(一面から続く)

手に入れたものを、ざくざくばらばらと思いつくままに書きなぐってみたけれど、なるほど、悪くはない。しかも、未来にもまだ未知の可能性があるようにさえ見える。だが、待ちたまえ。インターネットの登場で手に入れたものだけでなく、失ったものがあるのを忘れてはごさんせんか。

オートバイはより遠くまでの移動を可能にしてくれたけれど、そのおかげで、歩いてきたときには見えたり聞こえたりしたものを通過してしまう。スピードを得たかわりに途中の景色や出来事の密度が薄れてしまったのだと言えよう。それと似た感覚なのだが、インターネットのおかげで肉体のリア

リティが薄まってきてしまっているのではないかと、感じることがある。ネットに依存しすぎているせいかな、時々思うのである、このケープルの向こう側にある私以外の全ての存在は幻想でしかないのではないかと、私の幻想でないのなら、オートマテイクなレスポンスを繰り返すだけの、誰かが作り上げたヴァーチャルなシステムに過ぎないのではないかと、そんなことをつらつらと考へていたら、でぶ猫が食事を要求して大声をあげ、脚に擦り寄ってくる。ふかふかで暖かく我儘で生な存在。この皮膚感覚はインターネットにはない。家内が寝ぼけながら大きな嘔。この感覚もインターネットにはない。

得るものがあれば失うものだってある。頗る自明のこと。それなのに、人は、目前の利に気を取られ、消え去るうとしていたものを見過ごしてしまいがちである。先達のおかげで文化や進歩という言葉で飾られ

るようなものを手に入れてきた結果が今私たちが生きる世界であり、それは同時に、よく言われるように失って初めてそのありがたみに気づくという愚を繰り返してきた結果でもある。この世界は得たものの積み重ねであり、失ったものの積み重ねもあり。

見上げれば、火星が赫然と輝いている。この夏の、六万年に一度の大接近では五千五百キロメートルほどの距離にまで近づくといい。およそ〇・〇六光年。今私の目に映るのは、ざつと三週間遅れの光だということになる。火星から地球まで、この光が旅をしてきた二十日余り、その間にも、私は何かを得て、そして、失って。こんなにちは、さようなら。そんな歌があったな。

(全太)

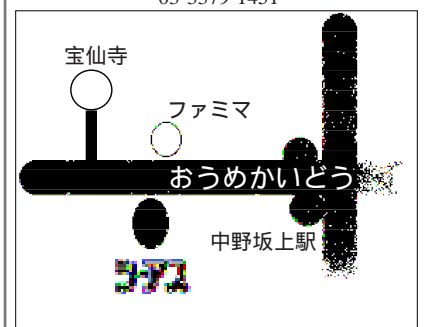


Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice: +81-3-3220-0644
Facsimile: +81-3-3220-0640;
e-mail: geta@geta-s.com
篠崎健一アトリエ

1クラス4人までの少人数制学習塾

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451



編集後記
からす新聞第五巻第八号(通巻第五六号)、無事、発刊できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
次号発刊予定日は二〇〇三年九月二五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。